

## 絵画に至る遍歴

### 磨墨静量

一九二五年、私は台湾の台北に生れた。六歳の秋まで、カソリック女学校の教師をしていた父と、本島人の小学校教師であつた母の許で兎も角楽しい生活を送っていたと記憶している。校長かが、トマス・デラホズというポルトガル人だったので、父は二十代の若さで校長代理をしていた。父は、私かが六才のときオルガンを購ってくれたが、母が、それから間もなく死亡した。買ったばかりの大きなオルガンと、突然訪れたこの悲しみは、たしかに、私の人生を芸術へ結び付ける端緒をなしたようである。間もなく私たち(父と妹二人)は内地へ引き揚げた。父は早く父母を失い東京で苦学していたが、それも大正十二年の大震災で挫折し、漸く台湾に渡って教師として身を立てていたのであつたが、又もや妻を失う厄に遭い、内地に引揚げてからは、酒と信仰のなかに沈潜したように見受けられた。狭く生活の場を守る父の許で生長したことは、私の人生観を次第に虚無的なものとし、成人するにつれて反抗的となり、ついには父と衝突して、勘当の身となってしまった。

どうしたことか、ピアノには恵まれて、学校でも、職場でも、ひとりで弾ける環境がつづいた。或る時期には法務府教官といいかめしい肩書で、教室で音楽を担当したこともあつた。私の成年期において、音楽が、ひとつの内面形成の役割を果たしたことは確実であり、絵を描く事が決定的になった今も、絵よりも音楽の方が好きである。私の心の支えとなるものは、やはり音楽を置いては他にないと思う。

学校を退いて軍隊に入る前後から、私の内面に短歌が介入してきた。軍用の部品工場で、短歌中心の雑誌を編集したことがはじまりで、終戦後、アララギに投じて、土屋文明の選を受けたが、特選のような欄に二首採られてから、潮が引くように短歌の世界を遠ざかった。

終戦直後、遼陽で居留民のなか投じた私は、素晴しく自由な、解放された一個の生物となった。いち早く、この混乱の街で結成された音楽クラブで、私はピアニスト、トシコ・アキヨシと、福島某という二人の女性と相知った。引き揚げも間近いある日、遼陽白塔のほとりで、五葉のクローバーを採取して、私は奇蹟を感じた。それまでの短い期間に、急速に高まっていた、トシコ・アキヨシとの間が、疑いを入れる余地のないまでに固まった事を感じたのである。それは一九四六年であつた。紛れもないフィアンセとして帰国した私達は、ある理由で音信不通となり、トシコを失った私は、自樂のはてに敗残者となってしまった。一九五四年、婦人画報で、トシコの成功を知った私は、同じく五七年、福岡・岩田屋で開くことになった山内・磨墨二人展の前夜、トシコの便りを受けとつた。トシコはボストンの音楽学校に通いながら、ニューヨークで、自らのバンドを組織して活躍していたのである。それは、私の、絵葉書に到る遍歴に終止符を打つものであつた。私は、よろめきながら辿りついたこの絵葉書の道を、揺がぬ確信を以て進むことが出来るのである。